

---

# ソロモン海の死闘

S . S

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソロモン海の死闘

### 【NZコード】

N8459C

### 【作者名】

S・S

### 【あらすじ】

1942年7月2日、アメリカ軍は対日反攻作戦「ウォッシュタワー作戦」を発令。同年8月7日、作戦の一環としてソロモン諸島のガダルカナル島・ツラギ島へ上陸した。これに対し日本海軍はミッドウェイの恥辱をすすぐべく反撃を開始するが……。

## 第1話 米軍の上陸（前書き）

注意：この小説では、実在した人物や艦艇を多数使わせていただいているが、架空戦記ですので細かい人物名や各航空隊の戦力などは実際と違いますし、戦闘の結果なども実際の戦史とまったく違います。当たり前ですけどね。

## 第1話 米軍の上陸

「長官！ シラギ・ガダルカナル両島守備隊から緊急電です！」

電信兵の緊迫した声が広島湾に停泊中の戦艦「大和」<sup>やまと</sup>の艦橋内に響いた。

「どうした？ 読み上げなさい」

山本五十六連合艦隊司令長官は落ち着いた声でたずねた。

「はっ！ 『シラギ島』『ソロモン諸島の島の一つ』守備隊より緊急電。米軍、本島に上陸を開始せり。敵の攻勢大規模にして、我、最後の一兵まで戦うつもりなり。武運を祈る。天皇陛下万歳』『ガダルカナル島』同じくソロモン諸島の島の一つで、同諸島中最大の島』守備隊より緊急電。米軍およそ1個師団、本島に上陸を開始せり。敵航空機も確認。我が航空基地は完成間近、我、最後の一兵まで死守せんとす。武運を祈る。天皇陛下万歳』」

長官が報告を聞き終わるとすぐ横にいた宇垣纏少将<sup>うがきまつめ</sup>が言った。

「長官！ 好機です。敵はわが航空機の活動圏内にあります。すぐラバウル航空隊に命令し敵輸送船団を叩きましょ！」

長官は即<sup>そく</sup>返した。

「つむ。ラバウル航空隊に出撃命令を出せ。ただし敵機動部隊が出ているようから警戒を怠るな。攻撃隊は一波に分けて出すんだ。ガダルカナル島の守備隊には抵抗せず密林<sup>ジャングル</sup>へ後退するように言つてお

け。それと我が第1艦隊と第3艦隊をトラックまで進出させておこう

「長官、戦艦を出されるのですか？」

そう言つてきたのは参謀の黒島亀人大佐だ。確かにこの状況では空母部隊である第3艦隊はともかく戦艦部隊である第1艦隊など使いようがないように思える。

「この戦いはきっと長期戦になる。米軍は大軍を揚陸した。死ぬ気で守るはずだ。敵艦隊と一緒に戦やれるかもしれない。それに戦艦の艦砲射撃は強力だ。陸兵の大きな手助けにもなるだろう。それと開戦以来ずっと内地に座り込んでこいつらにたまには運動をさせてやらないとな」

黒島大佐は少し口元を緩ませ、確かに、と返し暗号を送るために艦橋を出て行った。

1時間後、ニューブリテン島各地の航空基地から第1時攻撃隊が出撃した。

零戦18機、一式陸攻27機からなる攻撃隊は2時間半後にガダルカナル島上空へと到着、上空に敵機はないもののものすごい対空砲火に迎えられることになった。

陸攻隊は対空砲火をかいくぐり海面ギリギリまで高度を下げ雷撃を開始、一式陸攻の爆弾倉から次々に魚雷が投下されていく。水飛沫をあげて海中へと入った魚雷はしばらく潜つていくと少し深度を上げ、調停された深さ5メートルを進んでいった。

そして何本かの魚雷は敵艦へぶつかって爆発、大きな水柱を立てた。炎上した艦艇から上がる爆煙で空が覆わっていく中、第2波の攻撃も始まった。

零戦15機に護衛された一式陸攻23機は水平爆撃を行つべく爆撃航程を開始、敵艦の真上までくると次々に25番爆弾（250キログラム爆弾）を投下した。

ヒューと甲高い落下音を立てながら落ちていき、敵艦や海面に叩きつけられ炸裂し、盛大な水柱や爆煙をあげた。

爆弾倉を空にした陸攻隊は帰投し、零戦隊も付近の艦艇や上陸した部隊に機銃掃射を加えて帰路についた。

しかし、この攻撃では大した戦果はあがらなかつた。

航空隊は零戦2機と一式陸攻5機を失つたのに対し、敵艦隊に「えた損害は物資を揚陸し空になつた輸送船3隻を炎上させたのと、護衛の駆逐艦1隻に爆弾1発を命中させただけだつた。

一方、攻撃不十分との報告を受けた連合艦隊司令部（戦艦「大和」艦上）では次の攻撃作戦を練つていた。

ラバウル航空隊だけでは敵に決定的打撃を「えることはできない、しかし第1艦隊も第3艦隊も内地にいるためすぐに駆けつけることはできない。

とりあえず内地や台湾に残つてゐる零戦と一式陸攻にラバウルまで移動するよう命じたものの、すぐに攻撃できる手段が見つからなかつた。

しばらくして司令部内に再び電信兵の声が響いた。

「長官！ラバウルの神重徳大佐より意見具申の電報が来ております」

## 第1話 米軍の上陸（後書き）

どうでしたか？次の話もできるだけ早く書いていきたいと思つています。作者は今回初めてこういう戦記ものに挑戦しました。次に生かしていきたいので、是非今回の話に対し意見や感想、誤字脱字等の指摘をお願いします！

## 第2話 第1次ソロモン海戦

神参謀からの意見具申が届いた連合艦隊司令部ではその意見具申を取り入れ、実行を許可した。

彼の作戦とは現在ラバウル港にいる第8艦隊の全力をあげて敵船団を夜襲するというものだった。

参加兵力は重巡洋艦5隻「鳥海 青葉 衣笠 古鷹 加古」、軽巡洋艦2隻「天龍 夕張」、駆逐艦1隻「夕凪」。

艦隊司令は三川軍一中将で、「鳥海」を旗艦とした。

艦隊は午後1時にラバウル港を出港、日没とともに戦闘配備でガダルカナル島周辺の海域に突入した。

30分後、三川中将は水上偵察機に発艦を命令、「鳥海」などから3機の零式水偵が敵泊地の偵察に出撃する。

15分後、水偵からガダルカナル島のルンガ泊地に敵輸送船団と護衛艦艇の一部がいると報告してきた。

その数分後、艦隊の先頭を行く「鳥海」の見張り員がサボ島付近をゆっくりと航行している敵駆逐艦を発見。

三川中将は敵艦がこちらを発見していないことを見てとり、そのままゆっくり前進して敵艦を追う。

そして10分ほど追尾していくと今度は前方に無警戒のまま単縦陣で進む重巡洋艦3隻を発見、三川中将は水上偵察機に照明弾投下を命じ、攻撃を開始した。

まず、重巡部隊の一斉射撃から始まり敵重巡3隻の先頭艦に砲撃を集中した。

命中した閃光あたりが一瞬明るくなる。

さらに第2斉射でさらに命中弾を与え敵先頭艦は炎上した。

また次の瞬間、「鳥海」が発射した魚雷が敵2番艦に、「青葉」、「

「衣笠」が発射した魚雷が敵3番艦に命中し、このうち3番艦は弾薬庫に引火したのか大爆発を起こし沈みはじめた。

2番艦にも火災が発生している。

5分後、「夕凪」が単艦で敵艦に肉薄、炎上していた敵先頭艦に雷撃を加え3本を命中させ、止めを刺した。

敵艦は右舷に大きく傾斜しはじめ次第に海中に姿を消していく。一方はじめに追尾した敵駆逐艦にも「夕張」「天龍」が砲撃を加え損傷させた。

敵艦隊は突然の奇襲に混乱したのか、1発も打ち返してこない。

「鳥海」らが炎上している敵重巡にどごめを刺すべく砲塔をまわした時、別の方向でチカッと一瞬光った。

「左舷前方、敵艦発見！」

見張り員が叫んだ次の瞬間、「鳥海」の近くにいくつもの水柱が立つたのと同時に「鳥海」に振動が走った。

「左舷中央部、敵弾命中！」

「2番高角砲指揮所被弾、使用不能！」

「左舷高角砲指揮所被弾、指揮不能！」

次々と被害報告が入ってきた。

2発ほど被弾したらしく、高角砲に被害が出た。

艦長は応急班に負傷者の運搬を命令し、三川中将は砲撃目標を新手の敵艦に変えるよう指示した。

敵の新手は見張り員の視認によると巡洋艦クラスが2、駆逐艦クラスが5。

ただしバラバラとやってきており陣形を組む間もなく出撃してきた

様子だ。

日本艦隊は敵艦隊にむけ一斉射撃を開始、先ほど撃つてきた敵艦に砲撃が集中、水柱で敵艦が一時見えなくなつた。

敵艦も反撃してきたがおののがバラバラに撃つてきているのでほとんど命中しない。

一方、日本側は組織的攻撃でありもともと夜戦に自信がある。結果は歴然としていた。

結局航行不能に陥つた巡洋艦1隻と駆逐艦2隻は放棄され、大破した駆逐艦1隻が沈没を防ぐため海岸に乗り上げた。

また、初めの戦闘で炎上していた敵重巡も沈没し、残りの艦艇は損傷して暗闇にまぎれ撤退した。

敵艦隊が撤退を開始すると三川中将は追撃を主張する参謀達を押さえ、輸送船団への攻撃を行うよう命令した。

ルンガ泊地には輸送船12隻がいた。

無論反撃などできるわけもなく、日本側が一方的に攻撃し、すべての輸送船を撃沈してガダルカナル島付近から離脱した。

時間的にギリギリで、なんとか日の出前に離脱することができ、米軍機の攻撃にさらされことなくすんだ。

こうして第1次ソロモン海戦は日本軍の大勝利に終わった。

しかし、ガダルカナル島には海軍陸戦隊と設営隊の約3千名が取り残されていた。

このままでは彼らは敵に掃討され死ぬか、餓死するしかない。どうすれば彼らを救出できるのだろうか…。

## 第2話 第1次ソロモン海戦（後書き）

どうでしたか？是非感想を書いてください！待っています。

### 第3話 占領か、撤退か

「長官！ 我が軍の大勝利です！ 第8艦隊は夜襲に成功。 敵重巡洋艦4、駆逐艦2、輸送船12を撃沈、駆逐艦1隻を擱坐、そのほか巡洋艦1、駆逐艦数隻に損害を与えました。 我がほうの損害は『鳥海』が敵艦の砲撃で小破しただけです。 敵上陸部隊はガダルカナルに孤立しました」

黒島参謀が第1次ソロモン海戦の結果を報告すると「大和」の艦橋内では歓声があがつた。

敵艦隊に大損害を与えた上味方の損害は軽微。

敵船団も全滅させまさに完勝であった。

山本長官はその後しばらくしてから参謀達を集め今後の作戦方針を検討した。

参謀達の大半を占めた意見は陸軍部隊をガダルカナルに揚陸、同島を奪還すべし、というものだった。

しかし山本長官には参謀達の意見を聞きながら疑問に思うことがあつた。

ガダルカナル島を維持する意味があるのか、ということである。

もともとガダルカナル島とツラギ島にはFS作戦（フィジー諸島及びサモア諸島攻略作戦）のために前進航空基地が必要だつたことから上陸したのだが、当のFS作戦はミッドウェイ海戦で空母4隻を失つたことなどで中止されている。

第一ここを占領したところで維持するほうが大変である。

それに戦略的に見てもこの占領で米豪間の連絡を遮断できるわけでもない。

どう見ても日本側に躍起になつて占領する意義が見出せなかつた。

「宇垣君、私の率直な思いを言わせてもらつていいかね？」

山本長官は参謀達の論戦を遮つて言った。

「私が今自分なりに考えていたのだが私はガ島（ガダルカナル島）を維持する必要はないと思つ。 F S作戦は中止されているし、ガ島を占領したところで米豪間を遮断できるわけではない。よつて陸戦隊と設営隊は潜水艦で収容して部隊を撤退させるべきだと思つ。しかし、今回の戦いは米機動部隊を撃滅するまたとない機会もある。よつて米上陸部隊を攻撃し、こちらがガ島占領の意思があるようと思わせて敵機動部隊をおびき出しこれを撃滅するところのはゞづかね？」

この発言に参謀達はほぼ賛成し、米機動部隊をおびき出すための作戦立案へと入つていった。

### 第3話 占領か、撤退か（後書き）

今回は戦闘シーンがなかつたのでちょっと短めになりました。これだけで評価はしにくいかも知れませんが今までとあわせて是非評価をお願いします！！！

## 第4話 陸戦隊救出作戦開始！

前回の作戦会議でガ島からの部隊撤収が決定され、撤収作戦が立案された。

作戦の内容は潜水艦15隻を夜陰に乘じて接岸させ、部隊を収容しようというもので、さらにその支援のために重巡洋艦を中心とした艦隊を再びガダルカナルへ送り込み、敵飛行場や泊地を攻撃させ部隊の収容に気付かせないようにすることや、内地や台湾から増援を受けたラバウル航空隊に航空攻撃を盛んに行わせまだガ島を捨てる意思がないように米軍に思わせるようにすることなども決まった。

そして決定から約1週間後の1942年8月15日、作戦は決行された。

参加艦艇はガ島砲撃部隊が重巡洋艦5隻—「高雄 愛宕 摩耶 青葉 衣笠」、軽巡洋艦1隻「一那珂」、駆逐艦8隻「—陽炎 磯風 涼風 海風 瞳月 弥生 望月 卵月」。

潜水艦は艦名は諸略するが、「巡潜3」型1隻、「巡潜甲」型3隻、「巡潜乙」型5隻、「海大4」型1隻、「海大5」型2隻、「海大6」型3隻である。

また、砲撃部隊の指揮官は前回と同じく三川軍一中将、潜水艦部隊は各戦隊からバラバラに引き抜かれているため第6艦隊司令官小松輝久中将が自ら指揮をすることとなり、ラバウルにいる軽巡洋艦「香取」から指揮することになった。

潜水艦部隊は8月14日に一足先に出港、ガ島周辺の偵察を行った。入ってきた報告は「伊15」からの「敵駆逐艦2隻見ゆ」と、「伊9」からの「敵水雷艇数隻見ゆ」の二つで、どうやら小規模の哨戒部隊が配備されている様子だった。

一方艦隊は翌日の15日正午に出港し敵潜水艦に発見されないよう

に対潜警戒を厳重にして南下した。

15日午後1時、ラバウル航空隊はガダルカナル島へ向け出撃した。戦力は第1次攻撃隊は対艦用に魚雷を搭載した一式陸攻45機と護衛の零戦28機、第2次攻撃隊は陸用爆弾装備の一式陸攻53機と護衛の零戦32機が出撃した。

第1次攻撃隊はガダルカナル島上空に到着すると散開して、近くにいた敵艦艇に対し攻撃を開始した。

ルンガ泊地付近にいた米駆逐艦2隻には一式陸攻24機が襲いかかり両艦にそれぞれ3本の魚雷を命中させて撃沈。

また、島の裏側にいた輸送船3隻にも15機が攻撃を行い停泊中であつたためほとんどの機が命中させ撃沈した。

他の機もそれぞれ攻撃を行い駆逐艦1隻とたまたま浮上していた不幸な敵潜水艦1隻を撃沈し、零戦隊は飛行場や敵部隊の宿営地に銃弾を撃ちこんでラバウルに引き揚げていった。

その後少し予定より遅れて第2次攻撃隊が到着、爆撃を開始した。主に滑走路を重点的に攻撃し、そこらじゅうにクレーターができる。零戦隊は隣のサボ島の島影に隠れていた水雷艇3隻を発見して機銃掃射で攻撃、うち2隻は搭載していた魚雷に命中したのが大爆発を起こして轟沈、もう1隻も爆発に巻き込まれて沈没した。

これによりこの時点ではガダルカナル島付近にいた米艦艇は掃討され、一応ある程度の安全は確保されることになる。

これを受け連合艦隊は作戦の決行を最終決定し、敵に発見されると防ぐため分散して少し外洋の方へ行つていた潜水艦部隊に対しガダルカナル島近辺へと集結を命じた。

午後9時、艦隊はガダルカナル島水域へ侵入し砲撃の準備を開始す

る。

今回はある程度撃ちこんだりさつさと撤退するよう言われているため砲弾を弾薬庫からズラッと並べて、少しでも早く終わらせて帰ろうとした。

一応万が一の敵艦隊出現に備え前方を駆逐艦「睦月」と「弥生」が警戒していたが特に異常は認められず、午後9時半に砲撃を開始した。

まず飛行場に対し砲撃を行い昼間の爆撃と同じく滑走路を目標に攻撃を行う。

夜間のため正確に滑走路へ撃つ込むのは難しい。

そのため、零式水偵を飛ばして照明弾を投下させ、そこへ砲弾を撃ち込んだ。

砲弾が炸裂する度に深いジャングルが光に照らされる。

砲撃部隊は予定通り砲撃を行つていった。

一方潜水艦部隊は砲撃開始とともに浮上し陸戦隊の収容を始めた。兵員を潜水艦に搭載していったカッターを出して少しずつ収容していく。

人数が多く、カッターを何往復もさせねばならないため潜水艦達はギリギリまで岸に寄せていた。

「伊19」では艦長の木梨鷹きなしたかかず一少佐が艦橋の外まで上がりつて現場を見守っていた。

この状況で敵艦艇に襲われたらひとたまりもない。少佐を含め艦長達はさつさと終わらせて一秒でも早くこの場を離れたかった。

どうか敵部隊が出てきませんようにと祈るような気持ちである。

そして無事に2時間程で作業はほぼ完了し、出港準備に取り掛かった。

木梨艦長が出港直前に再び艦橋に上ると、まだ離れたところにいる砲撃部隊からの砲声が聞こえている。

頑張つてるなあと思つたそのときだつた。

ひとりわ大きな砲声が響き、直後に大きな爆発音が辺りに轟いた。何事だらうか、と思つて音がしたほうを凝視していたが暗闇で何も見えるはずがない。

敵の弾薬庫にでも命中したんだろうと思つて艦内へ戻るつとすると電信兵が艦内から急いであがつてきて、

「艦長！砲撃部隊から報告、『敵艦隊出現せり。敵艦隊は戦艦を含んでいる模様。潜水艦部隊は至急当海域を脱出せよ』とあります！」

と電文を読み上げて渡した。

「くそつ、やつきの砲声はその戦艦からか。全艦に告ぐ、敵艦隊出現。本艦はこれより最大戦速で当海域を脱出する。岸から離れたらすぐ潜行だ。機関始動、総員出撃用意急げ！」

木梨艦長は艦内に叫ぶと受け取つた電文を握り締め、砲声のするほうを睨んだ。

その視線の先では今まさにソロモン攻防第2戦目、第2次ソロモン海戦の幕が切つて下ろされていた。

## 第4話 陸戦隊救出作戦開始！（後書き）

今回は救出作戦の前編でした。次回は後編で敵艦隊との戦闘に入ります。

これまでの話を読んで気づかれたこととかありましたら、是非コメントをお願いします！

## 第5話 第2次ソロモン沖海戦

「敵艦隊発見、距離2万5000メートル！」

見張り員が叫んだ次の瞬間、すさまじい爆発音がし、見張り員は艦の近くに巨大な水柱が立つのを見た。

ガ島砲撃部隊旗艦重巡「高雄」の艦橋にいた三川中将は突然の敵艦隊出現に愕然とした。

敵艦隊の出現には警戒してはいたもののまさか本当に出てくるとは思ってはいなかつた。

しかしそくに反撃に出よひとし、艦長に向かつて言つた。

「艦長、敵艦隊に向け突撃だ。距離を詰めて一氣にやひつ」

しかし艦長は、

「長官、本艦はほとんど砲弾を撃ち切っています。あと3斉射すれば弾薬庫は完全に空になります。それにさつきの砲撃から察するに敵は戦艦です。ここは引いたほうがいいと思います。潜水艦部隊も収容を完了しました。ここに踏みとどまつても犠牲を増やすだけです」

と撤退を進言した。

三川中将は一瞬攻撃すべきかどうか悩んだが、状況的に分が悪いし、任務も完了したため撤退を決意した。

「砲弾がないなら仕方ない、撤退しよひ。全艦隊に命令、反転180度、最大戦速で当海域を離脱せよ」

艦長は「はつ」と敬礼して反転180度を命じて離脱を開始した。しかし、軽巡洋艦「那珂」から信号が送られてきた。

「我が戦隊は戦力十分、攻撃許可を求む。重巡部隊の退却を援護す」信号兵が信号を伝えると三川中将は敵戦艦に対して水雷戦隊を突撃させることに躊躇したが、本来日本海軍の水雷戦隊は敵戦艦を夜襲するために訓練されてきたことを思い出し、攻撃許可をだした。ただし、深追いはせずあくまで重巡部隊の退却援護に徹するよう信号を送らせた。

攻撃許可を受けた水雷戦隊の軽巡1隻と駆逐艦8隻は敵艦隊に向かって突撃を開始する。

司令の田中頼三少将は敵戦艦にできるだけ接近して雷撃を行い、その後反転して島陰に回って海域を離脱しようと思っていた。そのため雷撃の機会は一度のみ、各艦の水雷長に一回で確實に発射して命中させれるように魚雷の最終点検を行うよう命令する。またあわせて信管の感度を鋭敏にしそうにすることも命令した。

敵艦の起こす波に反応して早爆してしまった。現場では一発命中ということでかなり感度を高めに設定しているが、それが裏目に出てしまつたことをこの歴戦の水雷屋は知っていた。

一方この間にも敵艦からの砲撃は続いている。敵はレーダー射撃でありかなり正確な砲撃だ。

旗艦「那珂」のまわりも強大な水柱が立つては消えを繰り返している。

水雷戦隊は最大戦速でとにかく1秒でも早く近づこうと急いだ。しかし突撃開始から8分後、大きな火柱とともに「睦月」の姿が消

えた。

轟沈だつた。

おそらく生存者はいなうだろう。

田中少将は「睦月」の消えた方角を向いて1分間敬礼し犠牲になつた将兵を悼んだ。

それから5分後、敵艦の艦影を捉えた。  
しかし砲撃はしなかつた。

砲撃の際に光で自艦の位置が正確に見えてしまつからだ。  
レーダーに捉えられているとは言え、大して効きもしない砲を撃つて自分の位置を完全に知られたくない。

水雷戦隊は反撃もせず敵艦をひたすら追う。

そして3分後、射点に到達し次々に魚雷を発射した。

魚雷は戦隊で敵艦を包み込むように発射、何十本もの魚雷が敵艦に向かつっていく。

敵艦はなんとか逃げようとしたがさすがに1個魚雷戦隊分の魚雷をよけることなどできるはずもない。

敵戦艦と思われる大型艦に8本の大きな水柱が立つた。

ハ本命中、大きな爆発が敵艦に起こり火災が発生、艦は傾き始める。

火災の明かりで敵艦の姿が暗闇に浮かぶ。

また、少し離れたところでも爆発が起きた。

どうやら外れた魚雷が護衛の敵駆逐艦に命中したようだ。

「あれは敵の新型戦艦じゃないか？今までにない型だ。これは大戦果かもしれないぞ」

魚雷を発射後、反転して最大戦速で離脱しようとしている「那珂」から望遠鏡で炎上している敵大型艦を見ていた田中少将が言つた。

「そのようですね。皆に伝えてやりましょう

艦長はマイクを取り、部下に戦果を報告した。

「諸君、よく頑張った。我が戦隊は敵新型戦艦を撃沈した」

艦内の各所で大きな歓声が上がった。

飛び上がって喜びを爆発させる者もいたし、友と抱き合い感動を分かち合う者もいた。

艦長はしばらく兵達の喜びを聞いていたがそれを制して言ひつ。

「安心するのはまだ早い。これより、最大戦速で当海域を離脱する。他にも敵艦がこの海域にいる可能性もある。最後まで気を緩めるな。以上だ」

こつして水雷戦隊は敵戦艦撃沈という大戦果を收め翌日ラバウルへ帰還した。

潜水艦による救出作戦も無事完了し、日本海軍は今回も勝利を收めることができた。

## 第5話 第2次ソロモン沖海戦（後書き）

いかがでしたか？感想・評価を待つてます！また文章のおかしいところ等ありましたら、ご指導願います。

## 第6話 ラバウル防空戦：前編

第2次ソロモン沖海戦後、連合艦隊ではいかにして米機動部隊をおびき出しこれを撃滅するかということが話し合われているがなかなか決まらなかつた。

妙案がないまま月日は流れていく。

そして9月2日、ラバウル基地から緊急電が入つた。

「敵艦載機の大編隊、当基地へ接近中との報告あり。ラバウル航空隊の総力をあげこれを迎撃す」

連合艦隊司令部は大騒ぎとなり至急ラバウル港の在泊艦艇に脱出を命じ、ラバウル航空隊には戦闘機隊全力での迎撃と攻撃機などの機体の擬装を命じた。

少しでも航空機の損害を小さくするためである。

また、敵機動部隊の搜索のためソロモン諸島方面にいる潜水艦部隊に対し敵機動部隊の搜索を命じ、トラック諸島の水偵基地からも一式大艇を索敵のためソロモン方面へ出撃させた。

そして第3艦隊にはいつでも出撃できる状態にするよう命令を出した。

しかし、敵を見つけたとしても攻撃できる可能性は限りなく低い。今回は完全に後手に回ってしまつておりいかに損害を少なく切り抜けるかが問題であり、それは前線部隊の奮闘にかかっていた。

ラバウル航空隊は基地にいた零戦105機に全機出撃を命じ、一式陸攻145機、九九式艦爆や、九七式艦攻など85機には空襲に備え擬装するようにを命じた。

草むらや密林の中にいれたり上から草をつけたネットをつけたりし

てなんとか見えないよう隠していく。

この作業には陸軍や陸戦隊の兵士も動員された。

たまたま偵察飛行中の一式陸攻が約450キロメートルも離れたところで見つけてくれたから（この後無論撃墜された）何とか時間が1時間以上あつたからこうして迎撃や擬装ができるわけで突然の奇襲だつたら間違いなくラバウル航空隊は大損害を受けていただろう。

ラバウル港でも空襲に對する準備が始まっていた。

このときラバウル港には第8艦隊の重巡洋艦4隻、軽巡洋艦2隻、駆逐艦7隻、それに輸送船5隻と哨戒艇などの小型艦が8隻ほどいた。

とりあえず重巡と軽巡、それに駆逐艦はビスマルク諸島を迂回してトラック諸島へ脱出することとなり輸送船と小型艦は島影などに隠れて空襲をやり過ごうとした。

第8艦隊は出港用意などほとんどしていなかつたためすぐには出港できず、第1波の空襲は免れそうにもなかつた。

敵機発見から25分後、零戦隊は全機離陸を完了。

できるだけラバウルから離れた洋上で食い止めるべく敵編隊が発見された方角へ向かつた。

敵機は報告によると150機ほど。

敵の数のほうが多いが、零戦隊のパイロット達は自分の腕には自信があり、自分達なら食い止められるし、それにこれだけたくさん敵機がいるんだから自分の撃墜数を伸ばすいいチャンスと思ってい

た。

それから15分後、洋上で敵編隊を発見。

高度を上げ有利な状況で戦闘へ入るうとした。

敵はこちらに気づいたのか一部の機が前に出てきてそれ以外は散開。こちらは撃ちもらすわけにはいかないのでいくつかの飛行隊を両翼

へ展開させる。

そして数分後、空戦は始まった。

200機を超える航空機が入り乱れて火花を散らす。あつちでは敵戦闘機が火達磨になつて落ちていき、こつちでは零戦が空中で散るすさまじい戦闘となつた。

零戦隊は敵機を一機も撃ち漏らすまいと奮闘する。

もし敵の爆撃機や攻撃機を逃せばラバウルの艦隊や航空隊は大打撃を受ける。

それは防がないといけないとパイロット達は零戦を手足のように操り敵機に銃弾を見舞つていった。

戦闘開始から30分後、敵機は耐え切れなくなつたのか逃げ始めた。パイロット達は追撃して一機残らず叩き落してやろうと思ったが、

飛行隊長達は第2波が来る前にラバウルへ帰還し、燃料や弾薬の補給を行うと命令したため渋々引き上げる。

結局この空戦での戦果は報告を総合すると57機を撃墜し、30機余りに損傷を与えていた。

多少の誤認はあるにせよ大戦果である。

こちらの損害は15機が撃墜され11機が被弾、うち3機は操縦困難でありふらふらしながら飛んでいる。

ラバウルに戻つたら被弾機から優先して着陸させ半分は空中待機することにした。

すでに敵の第2波はラバウルの近くまで来ているかもしれない。パイロット達は急いだ。

## 第6話 ラバウル防空戦・前編（後書き）

どうでしたか？感想お待ちしています。

## 第7話 ラバウル防空戦・後編

空戦を終えてラバウルに戻った零戦隊は損傷機から順に基地へ着陸した。

半分の約50機は上空で待機。

まだ燃料は1時間か2時間は飛べる量がある。

しかし弾薬はかなり消耗したため早く補給をしたかった。

操縦困難に陥っていた3機のうち2機は無事着陸。

しかし1機は車輪が下りず胴体着陸をしたが炎上、パイロットはかろうじて脱出に成功した。

他の機も順次着陸していき燃料補給を開始する。

空中待機以外の全機が着陸を完了したとき、ラバウル基地の電探が何かをキヤッヂした。

この電探は性能が恐ろしく低く、「ある方角に何かがある」ということがわかる程度の代物だが、とりあえず試しに配備されていたものだった。

電探が捉えたものが何か、それは敵の第2波の攻撃隊しかない。基地にいる全兵士が弾薬や燃料缶を持って走りまわっていたが、補給中の零戦隊が離陸できるまでにはどんなに急いでも30分はかかる。

それまでは空中待機中の零戦隊が持ちこたえるしかなかつたがそれはさすがに厳しかつた。

15分後、敵機の大編隊を視認。

100機ほどの航空機が向かってきていた。

先ほどの戦闘で疲れている日本機と違い元気いっぱいの米機がラバウル在泊中の艦隊や航空基地へ攻撃をかけてきた。

敵の艦攻隊は日本軍の戦闘機隊の攻撃を受けつつもラバウル港上空へ侵入、雷撃を開始した。

ラバウル港には未だに出港できていなかつた第8艦隊があり、それらは雷撃にさらされることとなつた。

集中攻撃にさらされたのはラバウルにいた艦の中でもつとも大きい重巡洋艦の「青葉」と「衣笠」だつた。

「青葉」「衣笠」は精一杯対空砲火を撃ち上げ、戦闘機隊もなんとか雷撃を防ごうとしたが、敵戦闘機に妨害され雷撃を防げなかつた。あわせて26機のデバステーター雷撃機が魚雷を投下、うち6本が命中した。「青葉」は大火災を発生させ大きく傾斜していった。

また少し離れたところにいた同型艦の「衣笠」も5本の魚雷を喰らい黒煙に包まれていた。

この2艦以外は大きな損害を免れた。

また飛行場にも敵急降下爆撃機が来襲。

ドーントレス急降下爆撃機は飛行場に駐機中の零戦や隠しきれなかつた一式陸攻などに爆弾を投下していく。

もちろん滑走路や飛行場施設も攻撃の対象となつていて。

そして敵戦闘機隊は「丁寧に仕上げの機銃掃射をして引き揚げていつた。

零戦隊は初めこそ敵戦闘機隊と交戦したものその後半はほとんどの機が弾切れを起こし反撃できなくなつていた。

地上にいた機は何機か離陸を試みたが途中で機銃掃射を受けたりしてほぼ地上で撃破された。

結局この戦闘での損害は零戦11機を撃ち落とされ、5機が被弾。

また地上で零戦8機、九九式艦爆4機、九七式艦攻7機、一式陸攻18機が破壊され、その他15機が機銃掃射で被害を受けた。

滑走路や飛行場施設の一部も被弾。

航空機の運用に大して差支えはないが航空隊司令部が被弾し、飛行

隊長数名が負傷した。

また艦艇の損害は重巡洋艦「青葉」「衣笠」が沈没。また、機銃掃射で41号掃海艇が損傷した。

こちらの戦果は敵機15機の撃墜のみ。

連合艦隊としては、重巡2隻の損害は大きかった。しかし、米機動部隊も航空機をこれだけ撃ち落されればしばらく活動は鈍るだろう。

つまり今回の戦闘は痛み分けに終わったといえる。

しかしこの日の夜、米機動部隊は思わず被害を受けることになる。

## 第7話 ラバウル防空戦・後編（後書き）

更新が遅くなったり早くなったりと不規則ですいません。次話は遅くても来週の土曜までには出したいと思いますんでよろしくお願いします。

ラバウルでの戦闘があつた日の夜、哨戒任務にあたつていた潜水艦「伊ー168」は思わぬ敵に遇つた。

深夜、いつものように空気の入れ替えや電池の充電のため浮上して航行していると遠くに艦隊らしきものを発見した。

遠すぎて艦種などはわからなかつたが、少なくとも味方でないことは確かだ。

ここはソロモン諸島北550キロの海上であり、こんなところに味方の艦艇が展開してゐるなんて聞いたことがない。

それにガダルカナル島に敵航空隊が進出してからこの辺りは敵機の攻撃圏内に入つてゐる。

そんなところを通過るのは敵艦隊、しかも昼間のラバウル空襲から察すると空母を含む敵機動部隊だ。

無論、厳重な対潜警備が行われてゐるはずであり容易に手を出せる相手ではない。

とりあえず連合艦隊に報告を行つ。

「我、ソロモン諸島北550キロメートル地点において敵艦隊を発見せり。未確認なれども敵空母機動部隊の可能性高し。攻撃許可を求む」

報告を受け取つた連合艦隊司令部では会議が行われた。

しかし、敵機動部隊はここトラック諸島から何千キロも離れており、第3艦隊で追いかけても当然間に合わないといつことでとりあえず現場付近にいる「伊ー16」「伊ー154」「伊ー168」の三隻の潜水艦に攻撃させることにした。

ただし、潜水艦による攻撃は逆にこっちが沈められる危険性の方が高いため、あくまで隙があればとこゝで無理な攻撃は行わず、

敵に発見された場合は速やかに退避することが命じられた。

報告してから40分後、追跡を開始していた「伊ー168」に連合艦隊司令部からの攻撃許可が届いた。

艦長は生駒忠義少佐。  
いこまだだよ

生駒艦長は潜水艦以外の艦に乗つたことがないといつ根つからの潜水艦乗りで、潜水艦に初めて乗つてからもう20年ほど経っている。彼は海軍大学校なんかに進んで型どうりの出世をすることなど望まず、死ぬまで潜水艦に乗つていようと決めた人物だ。

そのため彼の腕は海軍隨一で、潜水艦を手足のように操ることができた。

この大東亜戦争（太平洋戦争）では1942年2月のわずか1ヶ月の間に輸送船5隻と駆逐艦1隻を沈めて潜水艦乗りの間で評判についた。

また、この潜水艦「伊ー168」も日本海軍潜水艦の中では有名な艦だ。

それはミッドウェー海戦において損傷した米航空母艦「ヨークタウン」を撃沈した潜水艦だからだ。

そのときの艦長は生駒少佐ではなかつたが水兵たちはそのまま。

水兵達は今回の命令を知るとまた米空母を沈めてやろうと意気込んでいた。

追跡すること2時間、ようやく米艦隊の後方5千メートルまで近づいた。

生駒艦長は潜望鏡を上げ敵艦隊の様子を見る。

「潜望鏡上げ」

潜望鏡がまだ上がりきらないうちから潜望鏡を敵艦隊の位置を予測

しておいてそちらに回す。

数秒後、潜望鏡が水を切つて水面に出た。

「潜望鏡下ろせ」

潜望鏡が水面にいたのはほんの数秒である。

そのわずかな間に敵の針路、速力、方位角、距離を測定する。

熟練の技とは恐ろしいものだ。

生駒艦長はマイクを手に取り部下に敵情を伝えた。

「全艦に告ぐ。敵空母確認。3隻いる。ほかに戦艦クラスが2、巡洋艦クラスが5ないし6。駆逐艦は見えるだけでも15はいた。敵は3段構えの輪形陣を形成している。そう簡単には攻撃をさせてくれないだろう。今回の水雷戦は非常に困難な戦いとなる。総員奮励努力せよ。以上だ」

## 第8話 水中の死闘・前編（後書き）

毎回遅くてすいません。できるだけ早く次話を投稿できるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

あと、生駒艦長は実在しません。筆者が勝手に作った歴戦の勇士です。

## 第9話 水中の死闘：後編

さらに2時間30分後、敵艦隊の一番外側の艦艇の真下を通過した。キーン、キーンという探信音がやむことなく響いている。

ここまで来ると一つ一つの動きにすこく慎重になる。

すでに爆雷防御のためにガラス類を片付けたりしてあり、乗員も無駄な音を立てないように慎重に動く。

うつかり大きな音を立て、真上の艦の聴音器に聞かれたら……。無論爆雷の雨が待っている。

15分後、生駒艦長は再び潜望鏡深度を命じた。

ここまで来ると潜望鏡を上げるのは非常に危険である。敵艦はもうすぐそこなのだ。

しかし、潜望鏡を上げないと敵艦がどこにいるのかわからない。艦橋内では全員が緊張でこわばった顔をしている。そして、

「潜望鏡上げ」

すっと潜望鏡が上がっていく。海面に出るとすばやく潜望鏡を回し敵空母を確認する。

「潜望鏡下げ」

今回もわずか5秒程度。

まだ強力な対水上レーダーが装備されていないため見つからないが史実ではこれが1年後ぐらいになると潜望鏡を上げただけで探知されてしまい、潜水艦の被害が急増し始めるのだがもちろん艦長を含

め日本海軍の誰もがそんなことは知る由もない。

艦長は艦内スピーカー用のマイクを手に取り、

「総員に告ぐ。本艦は敵大型航空母艦右舷後方1200メートルのところに出た。ただ今より雷撃を開始する。命令一つ一つに注意し、寸分たりとも後れるな」

艦長は変針を命じ一番近いところにいる敵空母に艦首を向けさせた。一方魚雷発射管室では最後の調整が続けられていた。

重たい魚雷と水雷科員が格闘する。艦長は報告を待った。

その間にも微妙な針路の変更を行う。

敵空母は先ほど見たところやや右へ舵をとっていた。

艦長は敵空母と自分の艦の動きを頭の中に描きながらタイミングを待ち続ける。

「前部魚雷発射管、発射用意よし」

水雷長から報告が来た。

艦長はその報告を受けると最後の確認としても一度潜望鏡を上げた。

すると幸運なことに敵空母はまだ右へ舵を取り続けていため願つてもない角度、こちらにその腹をさらすように進んでいく。

艦長は今こそチャンスと雷撃を決行した。

「1番2番魚雷発射管、撃え！」<sup>て</sup>

魚雷2本が発射管を飛び出して行った。30秒後、次の魚雷を撃つ。

「3番4番魚雷発射管、撃え！」

さらに2本が続く。

このあらじて撃つたのはどれかに当たることを期待して少し散らす  
という意味もあるがどういかといつて艦の後部に命中するよつこ  
たものだ。

艦の後部に上手く命中し、機関室もしくは缶室に命中すれば大爆発を起こし艦は轟沈する。

「…ともそへ上手くはいかないだ」かとにかく1本三でればしばらく稼動可能な空母を減らすことができる。  
そうすればこれから作戦が少しでも有利になるだろつ。

-77-  
ノーナード

金田一の死

少し遅れではあるが、行一闇に来て、じはぐして大爆発音が響いた。

「俺達は敵さんの空母をまたやつつけたぞ！」

艦内のあちこちから歓喜の声が聞こえる。

艦長も今までの緊張した顔を少し崩したか問題はこれからだ。どうせ、空母を沈められた敵艦達が自分達を躍起になつて探すはずだから。

攻撃後、2時間ほどは運良く見つからずですんだ。

敵艦が上を通るたびに機関を止め、息を殺して進んだ

逐艦から爆雷が投下される音を聞いた。

1隻2隻の攻撃なら受けてたつてやる  
船長は腕を組んで

そう意気込んだが海上の敵の数はそれどころではなかつた。

「新たな敵艦2隻接近中！これで本艦付近にいる敵艦は6隻になりました！右舷上方の艦、爆雷を投下。4、いや6発！」

聴音器に耳を当てている兵が報告、といつより悲鳴を上げる。

くそつ、たつた1隻の潜水艦に6隻も駆逐艦を出してくるとは…。艦長もさすがにこれだけの数に出てこられるどビリジョツもなかつた。

とにかく爆雷に当たらぬよう回避を続ける。

敵艦からは嫌がらせのように探信音が響く。

そうして敵駆逐艦と格闘すること2時間、ついに電動機のバッテリーが切れてしまった。

今まではこの電動機が動くおかげで右へ左へと爆雷をよけていたがこれからはそうはいかない。

ここまでか……、と全員があきらめかけたそのときだつた。

「高速スクリュー音探知！その数8、敵駆逐艦へ向かいます！！！」

水測長が叫んだ。

「魚雷か？どつから撃つてきたんだ？」

艦長は水測長に問う。

「本艦の後方からです。おそらく水中か！」

水測長の返答をさえぎるようにすさまじい爆発音が響いた。  
敵駆逐艦数隻がまとめて魚雷を喰らつたようだ。

水中からといえど潜水艦しかない。  
味方の潜水艦が助けてくれたのだ。

「敵駆逐艦、退避していきます」

残った駆逐艦は予期せぬ攻撃を受け浮き足立ったのかあわてて引き揚げていった。

30分後、「伊・168」は浮上した。

しばらくすると2隻の潜水艦が近くに浮上してきた。

「伊・16」と「伊・154」だ。この2隻は付近の海域で連合艦隊からの攻撃命令を受け取つて捜索していたが見つからず途中でまたまた2隻が海上であり、それからともに行動していたところこの日本潜水艦のリンチを見つけ救つてくれたのだ。

艦長は感謝の信号を送り艦上に出てきた乗員達も帽子を振つて僚艦にありがとうと口々に叫ぶ。

つらく長い戦いはやつと終わつた。

結局この戦いでアメリカ軍は空母1、重巡洋艦1、駆逐艦3隻を失つた。

まず空母「ホーネット」が3本の魚雷を喰らい5時間後に沈没。また、外れた魚雷が運悪くその先にいた重巡洋艦「ポートランド」の艦首に命中し、高角砲の弾薬庫に引火し大火災となつた。

さらに運の悪いことに消化装置が停止した上火災が缶や主砲弾薬庫へと延焼したため爆発を恐れ放棄、30分後爆沈した。

駆逐艦3隻は追撃中に撃沈されたもの。

この損害は大変痛いものだつた。

特に「ホーネット」は貴重な航空戦力であり、ガダルカナル島を巡る戦いが続く中での今回の喪失は米軍の今後の作戦に影を落とすことになつた。



## 第9話 水中の死闘・後編（後書き）

前回の話で、付近の海域にいる潜水艦の艦名が「伊 - 16」、「伊 - 154」、「伊 - 188」になっていましたが、「伊 - 188」は「伊 - 168」の間違いです。大変失礼いたしました。

## 第10話 決戦へ（前書き）

携帯電話でこの小説を呼んでくださっている方、今回は少々読みにくくと思います。すいません。

## 第10話 決戦へ

連合艦隊司令部では新しい作戦の骨子がまとまりつつあった。

作戦名は「ガダルカナル G K攻略作戦」。

これは米軍に傍受されたために用意された作戦名である。では、作戦の内容を簡単に説明しよう。

まず、戦艦部隊と何も積んでいない空の輸送船団がラバウルから南下、目立つようにガダルカナル島を目指す。

そして敵がこの戦艦部隊を発見し、喰らいついたところに前日出港して待機していた2郡の空母機動部隊が敵機動部隊を攻撃、これを撃滅する。

無論、敵が上手いこと喰いついてくれるか、という心配はあるがもし出てこなければガダルカナル島の敵海兵隊を徹底的に叩いてやればいい。

また空母部隊が直接攻撃を受けたら、という心配もある。これは一応ラバウルから増援の戦闘機を飛ばすことで対処することにした。

基地航空隊は少しずつ母艦に着艦して燃料補給を受けつつ空中待機する。

もちろんこれで完璧ではない。他にも危険要素はいくらかあるが少々のリスクは承知の上である。

以下は今回の作戦の参加兵力である。

### 第1艦隊

第1戦隊	戦艦	大和	武藏	長門	陸奥
第2戦隊	同	山城	扶桑	伊勢	日向
第7戦隊	重巡洋艦	高雄	愛宕	摩耶	鳥海

第11戦隊	軽巡洋艦	川内	那珂	神通
第1水雷戦隊		駆逐艦		8隻
第2水雷戦隊		駆逐艦	8隻	
第3水雷戦隊		駆逐艦	8隻	
付属	航空母艦	鳳翔		
第3艦隊第1部隊				
第1航空戦隊	航空母艦	翔鶴	瑞鶴	
第4戦隊	戦艦	比叡	霧島	
第5戦隊	重巡洋艦	利根	筑摩	
第4水雷戦隊	軽巡洋艦	長良		
駆逐艦		12隻「駆逐隊1個付属」		
第3艦隊第2部隊				
第2航空戦隊	航空母艦	飛鷹	準鷹	
第3航空戦隊	同	龍驤	瑞鳳	
第3戦隊	戦艦	金剛	比叡	
第6戦隊	重巡洋艦	最上	鈴谷	熊野
第5水雷戦隊	軽巡洋艦	五十鈴		
駆逐艦	12隻「駆逐隊1個付属」			
第4航空戦隊	航空母艦	大鷹	沖鷹	雲鷹
第8戦隊	重巡洋艦	妙高	那智	羽黒
第12戦隊	軽巡洋艦	名取	由良	鬼怒
第6水雷戦隊				阿武隈
第11水雷戦隊	駆逐艦	8隻		

### 第3艦隊第3部隊（輸送船団護衛部隊）

第4航空戦隊	航空母艦	大鷹	沖鷹	雲鷹
第8戦隊	重巡洋艦	妙高	那智	羽黒
第12戦隊	軽巡洋艦	名取	由良	鬼怒
第6水雷戦隊				阿武隈
第11水雷戦隊	駆逐艦	8隻		

第12水雷戦隊	駆逐艦	8隻
第13水雷戦隊	駆逐艦	8隻

#### 輸送船団

第1輸送隊	輸送船	8隻
第2輸送隊	輸送船	8隻
第3輸送隊	輸送船	8隻
第4輸送隊	輸送船	8隻

以上が主な艦艇。この他ラバウル基地航空隊や潜水艦などが参加する。

また、今回の作戦のための空母に乗った経験のあるパイロット達を多数ラバウル基地に召集したり、搭載機を増やすために「大鷹」などでは甲板上にも航空機を並べたり（米軍では当たり前だが、日本軍ではしていない）、練習艦になるはずの「鳳翔」を引っ張り出し�たりして少しでも有利に戦おうと努力がされた。

他にもダニー空母（輸送船に木製の飛行甲板のようなものをのせて空母に似せたもの）を造ろうという案も出たりしたがそんな子供騙しは時間と資材の無駄ということで却下された。

## 第10話 決戦へ（後書き）

意見や感想をどんなものでもかまいませんのでお願いします！

## 第11話 接触

1943年1月12日、トラックから輸送船団と第1艦隊、第3艦隊第3部隊が出撃した。

わざわざ敵の潜水艦に見つかるようにゆっくりと進む。

輸送船団は空船だと喫水が浅くなるため中身がからであることが敵潜水艦にばれる可能性があるのでラバウルに送る物資や兵員を積んでいくことにした。

輸送船団は10日ほどかけてラバウル港に入港した。

2日で物資の揚陸を完了し、また空になつた輸送船に今度は石や砂を積み込む。

これには陸軍の将兵や陸戦隊も動員され、陸軍兵の中の口の悪い兵は海軍は石や砂で敵の船を沈めるつもりでいるのか、氣でも狂つたんじゃないかと毒づいた。

海軍の水兵達もなぜこんなことをするのかと首をひねつたが誰もその理由は分からぬ。

そして1月25日明朝、艦隊は出撃した。

第1艦隊は第1戦隊を中心に輪形陣を組み、第3部隊は輸送船団を囲むように展開する。

艦隊は輸送船団の速度にあわせゆっくりと進んでいった。

一方空母部隊である第3艦隊第1・2部隊はギルバード諸島から南下を開始した。

こちらは敵に動きを悟られないため完全に無線封鎖である。陣形もキュッと引き締め、厳重な対潜哨戒を敷く。

航海は順調で敵に発見された様子もなく12月25日午後には敵艦隊の予想進路付近に到着し、索敵を開始した。

1月26日朝、第1艦隊旗艦戦艦「大和」艦橋では山本五十六連合艦隊司令長官が艦橋で空を眺めていた。

「宇垣君、今日は敵機が来るかな?」

山本長官は隣にいる宇垣少将に話しかけた。

「食いついてくれないと作戦が成り立ちません。潜水艦部隊の報告では敵機動部隊はこちらの動きに対し出撃してきているようですし、今日は来るでしょう」

そう言つと宇垣少将はガダルカナルの方の空を睨んだ。

「つむ。上にいるラバウルの連中もやる気満々のようだし、この『大和』も実際に戦闘をやるのは初めてだから水兵達も張り切つている。今日は楽しみだよ」

そう言つて少し笑顔を浮かべた。

上空にはラバウル航空隊から送られてきた直掩機が50機ほどいる。それらが雲の間を見え隠れするのをしばらく眺めていると突然伝声管から報告が入った。

「見張り指揮所から艦橋へ! ガダルカナル方面より敵機飛来。カタリナ偵察機と思われます。3機向かってきます」

見張り指揮所の望遠鏡が敵機の姿をとらえたようだ。まだ電探は装備しておらず、こつして人の目で確認しなくてはならないのは不便なところである。

「やつと来なさつたようだ。宇垣君、直掩隊に連絡、しばらくは手を出すなと伝えてください。敵さんにしつかり見てもうりつてから落ち落とすよつにと」

山本長官は望遠鏡で敵機の姿を見ながら言つ。

敵機は数分後艦隊上空に到着ししばらく旋回していた。3周したかな、と思ったときカタリナの真上から10機の零戦が降つて来た。零戦隊はカタリナに機銃掃射を加えつすれ違い、編隊最後の機が銃撃しようとしたときにはすでに3機全機が火を噴きそれぞれ落ちていつていた。撃墜されたカタリナが水飛沫を上げて海中に吸い込まれていくと各艦からは大きな歓声が上がる。山本長官は最後の敵機が海中に消えるのを見届けた後、艦長に向かつて言つた。

「艦長、乙旗をあげてください。今日の戦いで日本の将来が大きく動きます。そのことを艦隊の全員に知らせるのです」

しばらくして「大和」のマストに乙旗が掲げられた。よく知られているように「皇国の興廃この一戦にあり。総員一層奮励努力せよ」という意味だ。他の艦の水兵達もすぐにこの旗が「大和」のマストにはためくのを見つけざわめいた。そしてしばらくして山本長官の言葉が伝えられた。

「今回の戦いは皇国浮沈を決める戦いとなる。海軍の総力を挙げた決戦である。全員死力を尽くして戦つてもらいたい。私も諸君とともに戦う。陛下のため、皇国の栄光のため、そして諸君の帰りを待つ家族のためにともにこの決戦を戦い抜こう」



## 第1-1話 接触（後書き）

更新遅くなつて申し訳ありません。パソコンの不調がなかなか直らずやつと今日になつて復活しました。この小説ももう少しで終わりです。最後までよろしくお願ひします。

## 第12話 第3次ソロモン海戦開始

敵機の大編隊が現れたのは敵の偵察機を撃墜してから約2時間後の午前10時8分のことだった。

見張り員の望遠鏡が水平線からできた豆粒のような敵機をとらえたのだ。

報告を受けた山本長官はすぐに命令を下した。

「敵機襲来の報を機動部隊に伝えてあげて下さい。飛来した方角も忘れずに。我が艦隊は少し各艦の間隔を詰めましょう。集中した弾幕を撃ち上げるのです。『鳳翔』には手持ちの戦闘機全機を迎撃にあげるよう伝えてください。それとラバウル航空隊にはさらに援護の機体を要請しておきましょう」

長官の命令に従い艦橋内で人が慌ただしく動き始める。

一方「鳳翔」では命令を受けとる前にすでに零戦が次々に発艦していた。

丁度燃料補給のため収容していたラバウルからの機体が離艦し終わって搭載機の出撃用意をしていたところだったからだ。こうして約70機の零戦が迎撃に上がった。

そして5分程経つと敵機と味方の迎撃機の戦闘が始まった。

敵の編隊は戦闘機80機、艦上爆撃機40機、艦上攻撃機70機に双発爆撃機50機が加わっていた。

双発の爆撃機と戦闘機の一部はどうやらガダルカナルから飛んできたらしい。

「敵機の数が多いな……」

長官がつぶやく。

確かにこれだけ来ると迎撃戦闘機だけでは全然足りない。かなりの損害が出るだろつと覚悟した。

それでも零戦隊は敵機の迎撃に全力を尽くした。

彼らのほとんどはラバウル防空戦を経験しており、あのとき味方を守りきれなかつたことを悔やんでいた。

だから今度こそはとめてやると硬く決意していたし、必死になつて戦つた。

しかし、それでも3倍以上もいる敵機をとめることはできなかつた。

零戦の攻撃を潜り抜けた爆撃機や攻撃機が第1艦隊に襲い掛かる。

その彼らを日本艦隊が猛烈な対空砲火で出迎えた。

実は第1艦隊の戦艦群はミッドウェイの敗戦の後残らず工廠に放り込まれて徹底的に対空兵器の増強が行われていた。

「長門」級は副砲を全部撤去され「山城」級や「伊勢」級は副砲だけでなく中央部の2基の主砲まで取られ高角砲や機関砲をどつさり積んでいる。

その対空火器がすさまじい弾幕を張つていた。

これに近接信管があれば…といつところだが日本海軍のだれもがそんなものを知らない。

しかしこの弾幕をも潜り抜けて敵機は爆弾や魚雷を投下してきた。特に「大和」や「長門」が集中攻撃にさらされていた。

まず戦闘開始15分で250キログラム爆弾2発が「大和」中央部に命中し高角砲1基と機銃座2基を吹き飛ばし20人近い兵士が死傷した。

25分には左舷中央部に魚雷1本命中。

33分にも左舷前部に雷撃を受けた。

浸水はすぐにおさまり戦闘航海に支障はなかつたが兵士数名が海に

投げ出されてしまった。

空襲は約1時間で終わった。

上空を飛ぶ零戦隊は42機まで減つてしまつてゐる。彼らは奮戦し、対空砲火とあわせて敵機44機を撃墜し30機ほどに損害を与えたようだ。

そして艦艇の損害は駆逐艦1隻が沈没、重巡洋艦「高雄」が魚雷3本を受けて大破し駆逐艦2隻に付き添わされて後退。

戦艦「長門」は魚雷4本と爆弾5発を喰らい速力が16ノットまで低下、艦隊から落伍した。

他にも戦艦「大和」「武藏」「伊勢」などが損傷している。

「まだ機動部隊は敵空母の所在をつかめないのか！？」

宇垣少将が少しイライラした声で通信参謀に問つ。

「はつ、まだ報告はありません。一部の海域では悪天候のため少し手間取つてゐるようだ……」

通信参謀が答える。

「くそつ、このままじゃこつちが危ないぞ。損害が予想以上に大きい。空中の零戦隊もまだそれなりの数はいるがもう弾薬がないだろう」

草鹿龍之介少将も宇垣少将同様イライラした声で言つ。彼は今回航空参謀として「大和」に乗つていた。

「そうだな……、弾薬切れの機体は格好の的になるだけ……。仕方ない、

零戦隊をラバウルに帰そう。参謀、航空隊にラバウルに帰るよう伝えてください。あと30分から1時間すれば次の応援が来る。それまで自力で持ちこたえよう

山本長官はそう言って外を眺めた。その視線の先にはもう次の敵機が現れていた。

## 第1-2話 第3次ソロモン海戦開始（後書き）

いつも山本長官の発言がぎこちなくなってしまってます。実際彼は敬語を部下に対しても使っていたようなことを聞いたので敬語でいきたいところなんですが第1話のほうでは常態になっていたりと。いつも自分は手抜かりがあるようです。

## 第13話 敵機動部隊発見！

「敵機襲来！ 戦闘機70、急降下爆撃機ないし攻撃機120、爆撃機60。距離、2万8000！」

見張り員の報告が伝声管から響く。

またすぐい数の敵機が繰り出されてきた。

山本長官は3隻と推定される敵の残存空母すべてが出てきていると確信した。

「敵さんは全空母を持つてきているようだね。それもほぼ全力でこちらを攻撃してきている。宇垣君、敵はこちらの空母の存在をまったく気付いてないようだ」

山本長官は望遠鏡で敵機を追っている宇垣少将に向かって言った。

「そのようです。ここで味方の空母部隊が敵機動部隊の所在を早く掴んでくれるといいのですが…。でないとこちらが全滅してしまいます。航行していても『プリンス・オブ・ウェールズ』を我が軍の航空隊が沈めたように戦艦は航空機には勝てないようですから…」

さつきまではすぐイライラしていた少将が敵機の大群を見たせいかそれが收まつて今度は珍しく弱気な発言をした。

「いや、あの戦艦には護衛機がまったくなかつた。しかし我々にはある。もうじばらくの辛抱だ。……よし、きつい一発をお見舞いしてやう。艦長、三式弾の射撃用意はできていますか？」

山本長官は艦長に問う。

三式弾とは対空用の主砲砲弾である。

砲弾の中にもたくさんの子爆弾が詰まつていて、時限信管によつて砲弾が爆発するとその子爆弾が周囲に飛散、あたりの敵機を撃墜するといつもの。

実際にこれを使う機会など今まで無く、今回が初めての使用だ。

「はつ。全主砲いつでも撃てます」

艦長がよどみなくこたえる。

「よし全艦一斉に射撃する。取り舵一杯、距離1万5000で全艦撃て」

山本長官はそう言つと敵機に視線を戻した。

敵機はだんだんと大きくなつていく。

見張り員が距離をカウントする。

「距離2万、1万9000、1万8000、1万7000、1万6000、1万5000！」

「撃え！」

艦長が叫んだのと同時に全艦の主砲が火を吹いた。  
この距離だから駆逐艦の主砲でも撃てた。

「ドオオン！－！」

すさまじい爆発音とともに空が閃光で一瞬見えなくなつた。

光が收まつて山本長官をはじめ艦橋の全員が空を見た。

1機残らず落ちたのではないかという思いはあつたがその期待は裏

切られた。

しかし、まったく無駄だったわけではなかつた。

「敵機接近中！約200機、まっすぐ」一ひらひらに向かってきます！…」

見張り員の声が飛ぶ。

しまつた、近寄せ過ぎて対空機関砲員がまだ配置につけてない、と長官は思つたが遅かつた。

主砲の爆風を避けるため主砲付近の兵は発射の際艦内に避難していったのだ。

「後方より航空機飛来！友軍機です！約180機、陸軍の戦闘機も40機ほど混じっているようです」

伝声管から見張り員の声が響いた。

「第3艦隊第3部隊より電信、我が艦隊への敵機接近の可能性低し、我が艦隊は搭載戦闘機の全力をあげ貴艦隊を援護す」

「陸軍戦闘機部隊より電信、我が航空隊も海軍の決戦に参加、貴艦隊を援護す」

次々と報告が入ってきた。

「陸軍も援護してくれるのか、ありがたいことだ」

山本長官が呟く。

「海軍機が陸軍機を誘導してきたようです。陸軍機は海上飛行に慣れてませんし。しかし、陸軍機は『屠龍』<sup>とちゅう</sup>、双発で若干動きの鈍い

機ですが火力が高いので爆撃機迎撃には役立ちます。零戦じゃなか  
なか落ちませんからね」

草鹿少将が味方の編隊を見ながら言つ。

陸軍航空隊は海の上を飛ぶことはほとんどなく、また飛ぶ必要もないため普通は海上飛行は不可能である。

しかし、海軍の作戦を知ったニューギニア方面の陸軍航空隊司令が海軍機の尻についていけば飛べると出撃させたらしく、なんにせよ、戦闘機の数は多いがいい。

そして両軍の戦闘機部隊が交戦に入った。

さきほどの第1波とは違ひ迎撃戦闘機の数が多いためなかなか敵の攻撃隊は戦闘機隊を振り切れず、艦艇を攻撃することができない。それに敵の護衛戦闘機の数が少ないため次々に爆撃機や攻撃機が撃ち落とされていく。

敵はこの激しい迎撃に耐えられなくなつたのか次々に爆弾や魚雷を捨てて退避しはじめた。

「艦長、水偵発進！ 敵の後を付いていかせるのです。」

空戦の勝敗が付くと山本長官は振り向いて艦長に言つた。

そして10分後、3機の水偵が発進した。

発進までは零戦が後を追つていて位置を教えており、水偵が追いつくと後退した。

そして後を追うこと1時間、眼下に敵機動部隊を発見した。

## 第1-3話 敵機動部隊発見！（後書き）

感想、評価お待ちしております！読んでの感想、意見等ありましたら是非お願いします。

## 第14話 反撃

「『大和』偵察4号機より報告。我、敵機動部隊を発見せり。大型空母3、戦艦2、巡洋艦6、駆逐艦32から成る。上空に直掩戦闘機認められず」

機動部隊を発見した偵察機から「大和」や機動部隊に報告が入った。

「よし、これで勝てます。パイロット達はみんなベテランです。彼らならやつてくれるでしょう」

宇垣少将はが山本長官に向かつて言つ。

山本長官はつむ、と言つただけで他には何も言わなかつた。

勝負はこれからで、まだどうなるか分からぬ。

山本長官は祈るような気持ちで敵機動部隊がいるであろう方角を見つめた。

偵察機が敵機動部隊を発見してから攻撃隊が到着するまでにさほど時間はかからなかつた。

第3艦隊（機動部隊）の二つの部隊は偵察機が敵機の後を追つていいとの連絡を受けるとすでに出撃用意をして待機していた攻撃隊を次々に飛ばしていただ。

先に着いたのは第2部隊の第1次攻撃隊だつた。

第2部隊は中型と小型空母から成る機動部隊で第1次攻撃隊の戦力は戦闘機45機、急降下爆撃機32機から成り、まずは制空権を得ようと戦闘機を多めに入れてくれる。

一方敵は偵察機が来たにもかかわらずそれが水上偵察機だから機動

部隊は出てきてないと思ったのか、それとも攻撃までにまだ時間があると思ったのか分からぬが攻撃隊を収容して燃料補給をさせていた。

その上戦闘機が上空にまつたくいなかつた。  
そこに日本軍の攻撃隊が来たものだからあわてて戦闘機を飛ばそうと思ったがそうはいかない。

結果はミッドウェイでの日本軍の悲劇をそのまま米軍にかえただけのものとなつた。

攻撃隊は敵戦闘機がいないのを見てとると、艦爆を3手に分けて敵空母に襲い掛かつた。

的戦闘機の発進を防ぐべく、飛行甲板めがけて急降下を開始した。  
無論米艦隊はその間ぼさつとしているわけではない。

すさまじい対空砲火を撃ち上げ始めた。

急降下中の艦爆の周りを機銃弾が飛ぶ。

普通の人間なら逃げ出したくなるような機銃弾の嵐の中を日本のパイロット達はまったく躊躇することなしに突撃した。

彼らは高度150メートルまで接近したから爆弾を投下した。

ここまで接近して投下するとほとんど外れない。

しかし、接近するといふことはそれだけこちらも撃たれるとこういふことだ。

そのため爆弾を投下できたのは32機中21機だった。

しかしそのうち15発が命中した。

「エンタープライズ」はそのうちの半分の7発を喰らい爆発炎上、甲板上や格納庫内の航空機や爆弾が誘爆して手がつけらなくなり命中からわずか15分で沈没した。

「ワスプ」は5発が命中、こちらも大火災を発生したが沈没にはいたらなかつた。

「サトラガ」は3発で済んだが甲板をやられ航空機の運用は不可能

になった。

こうして米機動部隊はたった1回の攻撃で航空機がまったく使えないくなつた。

そしてこういう状況の中、新手の日本機が到着した。

第1部隊の攻撃隊145機である。

こちらは攻撃隊を二波に分けることなく全力で攻撃を仕掛けた。

米空母3隻が確認された時点で他に敵機動部隊がいる可能性はなく、これが現時点での米空母の全力なのだ。

別艦隊からの攻撃を恐れる心配はなく、ガダルカナルの航空隊に備えて少しの直掩機だけ残してあとは全搭載機で攻撃をかけたのだった。

この攻撃隊は炎上する2隻の米空母に魚雷を5本づつ命中させ撃沈。また、戦艦「ノース・カロライナ」は雷撃隊の集中攻撃で魚雷7本を一度に左舷に撃ち込まれて大量の海水が流れ込んで転覆、沈没した。

さらにこのあと艦攻を中心とする第2部隊の第2次攻撃隊も攻撃に加わり、上記のほか重巡洋艦2隻、軽巡洋艦1隻、駆逐艦4隻を撃沈し、戦艦1隻を大破させた。

この大破した戦艦「サウス・ダコタ」は航行不能に陥り自沈という結果になつた。

「我、米機動部隊を撃滅せり」

攻撃隊からこの報告が入ると「大和」艦橋では大歓声が上がつた。涙を流して喜ぶ者もあり、山本長官もその1人だ。

彼はこの作戦が失敗したなら腹を切つて陛下と国民にお詫びするつもりだつた。

しかし、味方は多少損害を受けたものの敵機動部隊撃滅に成功し見

事戦局をひっくり返すことに成功した。

その成功に対する喜び、今までに散った部下達への謝罪や哀悼の気持ちが彼を涙させたのである。

## 第1-4話 反撃（後書き）

感想お待ちしています！次で最終話ですが、どうぞ最後まで読んで  
ください！

第3次ソロモン沖海戦での大勝利から2週間後、御前会議が行われ戦争終結へ向けての交渉開始が正式に決定された。

陸軍は当然反発したが、陛下が陸軍は余の国民をこれ以上苦しめたいのか、まだ殺し足りないというのか、と言わると静かになり戦争終結もやむなしと反対を取り下げた。

海軍に依存はない。

じつは日米両国の代表がハワイで会談を行つこととなつた。

この交渉は難航し、なかなかまとまらなかつた。

しかし、交渉の難航を知つた天皇陛下が自分が行くと自らハワイへ出向かれて交渉され、見事講和がまとまつた。

内容は、

- 1、日本は三國同盟を破棄、この戦争（第2次世界大戦）では中立を保つ。
- 2、日本は満州国の独立を取り消し3年後に中国へ返還する。
- 3、日本は本戦争中に占領した全土を返還する。ただし、戦争終結までは日本が統治する。
- 4、連合国は戦争終結後、返還された領土を速やかに独立させ、植民地支配を行わないこと。

などからなり、日本にとつて負けたような内容であるが、陛下は戦争を続けて国民を苦しめるよりはと1943年2月11日、調印された。

そして2月12日両軍に正式に停戦命令が出され、国民に戦争終結が知られた。

陛下はラジオで、講和の内容は日本にとって苦しいものではあるが、日本と世界の未来のためであると繰り返し演説され国民を説得された。

国民のほとんどは陛下の言葉で納得し、大きな混乱は起ららずに済んだ。

海軍ではこの日すべての艦船や基地で半旗が掲げられた。  
戦争中に戦死したすべての人々に対するもので、山本長官の命令である。

山本長官はこの日「大和」の長官室に一人こもり、この戦争を振り返っていた。

結果的に、この戦争では何の得るところもなくいたずらに人の命が散つてしまつただけとなってしまっている。

山本長官は沈む夕日を眺めながらこの戦争を止めるひとのできなかつた己の力不足を恥じ、もう一度と戦争をさせはしないと固く決意した。

夕日の光が彼を優しく包んでいた。

## 第1-5話 戦争終結（後書き）

いままでありがとうございました。執筆中に様々な方より「ご指導いたおかけで少しあは上手くなつたと思います。感想や評価をしてくださつた皆さんにはとても感謝しております。

また、この次には野球に関する小説を書くつと思つています。まだ未熟者で、上手な小説はかけませんが、そちらも是非読んでいただき、ご指導いただきたいです。

これからもこの若輩をよろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8459c/>

---

ソロモン海の死闘

2010年10月10日03時48分発行